
来ない彼と待つ私

三毛猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

来ない彼と待つ私

【Nコード】

N2594B

【作者名】

三毛猫

【あらすじ】

待ち合わせに間に合ったことがない彼。そんな彼をひたすら待つ私。クリスマスの夜なのに、なんで彼は遅れてくるの？

(前書き)

クリスマスが近づいてきたので書いてみました(〃^・ω・^〃)

クリスマスネオンが眩しい町並み。

携帯電話に着信はない。

何度もメール画面を見てもメールは届いていない。

もう一時間も約束の時間が過ぎていた。

麻生恵は待ち合わせ場所でひたすら彼を待った。

いつもこうだ。

待ち合わせに間に合ったことがない彼。

それをひたすら待つ私。

恵は彼にメールを打つ。

『どこにいるの？約束忘れた？あと一時間したら帰るね』

メールを送信して、ひたすら待つ。

待っている時間を持て余すように本を読む。

その本の中は甘い、甘い恋の物語。

今の自分にはない優しい彼と素直な彼女。

幸せいっぱい二人。

求める恋人の姿がここにある。

彼女より先に待ち合わせ場所に来て、彼女に遅いぞって嬉しそう
な顔をする。

彼は好きだ・・・と愛を囁き、優しく彼女を抱きしめる。

彼女も好きだよと笑う。

こんな幸せな世界は現実にはないのだろうか・・・？

「待たせたな。何やってんだ？」

「晃司・・・」

いつの間に着たのか彼、鳥羽晃司^{トバ コウジ}が恵の正面に立っていた。本を閉じて鞆にしまう。

「遅い。どーせ寝てたんでしょ？」

あきれ顔で自分より20cm以上高い身長の人に怒る。

寒空の下で待たされたのだから少しくらい怒ってもいいだろう。

「あゝ・・・悪かったって。怒るな」

両手で恵の顔を覆い、ははっと笑う。

暖かい手とは対照的に恵の身体は冷え切っていた。

それを暖めるようにおでこにキスを落とす。

「暖かい・・・」

ほう・・・と白い息を吐いて目を閉じる。

少しそのままできて暖まってから晃司は手を外す。

「行くぞ」

次いで恵の手を引いて歩き出す。

手袋越しの手も暖かくて幸せだと思う。

「どこに行くの？」

慌てて晃司の歩調に合わせて歩く。

晃司は恵をちらと見てから口の端を持ち上げる。

「秘密」

「・・・何それ？ どうせファミレスとかでしょ？」

あきれながらもクリスマスのこの夜に一緒にいられるのが嬉しかった。

「ふん、言ってる」

にっと笑って恵を見下ろす。

こんなに含まを持たせるのは何なんだろう、と恵は首を傾げた。

着いた先はビジネスホテル。

「ここで何すんの？」

一瞬怒りがこみ上げてきたが一応確認を取る。

したくないわけではなかったが、会ってすぐホテルってのは何とも味気ない。

しかもクリスマスの夜に。

「ご休憩じゃなくて、メシを食うんだ」

ぐいっと手を引いて自動ドアをくぐる。

三階くらいまで吹き抜けで、その真ん中に大きなツリーが飾られていた。

「わぁ・・・きれー・・・」

感嘆のため息と共に感想を述べる。

見上げるほどのツリーには天使をモチーフにした飾りがあり、今にも動き出しそうだ。

恵がこういったファンタジックな物が好きだと晃司は知っていたのだろうか？

ちらと隣に立つ彼を見上げると満足そうに笑っていた。

「こういうの好きだろ？」

無邪気になっと笑って子どものようだ。

「さ、行くぞ？」

また手を引いて歩き出す。

そのままエレベーターに乗り込んでパネルを押す。

その間も手をつながれたまま、彼を見上げるとやはり嬉しそうだ。

「どこまで行くの？」

言うのと同時くらいにエレベーターがゆっくりと停まる。

「もうすぐだ」

扉が開いて手を引かれる。

降りた階から迷いなく晃司は歩いていく。

まるで来たことがあるかのように。

一つの扉の前に立ち、カードキーを取り出す。

いつチェックインしたんだろう？と恵は思ったが、開け放たれた扉の中の世界に目を見開く。

そこには色とりどりのイルミネーションに飾られた部屋があった。驚きで声も出せない恵の手を紳士的に取り、口元まで持ってくる。

「メリークリスマス・・・愛してるよ、恵」

「え？」

恵はまた驚き、彼の顔を見上げる。

目の前にいるのは待ち合わせに遅れてくる彼ではなく、物語の中の優しい彼氏の姿だった。

「ほら、来いよ」

言い方はぶっきらぼうだけど、顔が――赤い。つられて恵も赤くなる。

そして中へ進むと温かい食事とクリスマスケーキ、冷えたシャンパンがセッティングされていた。

「これ・・・？」

恵は横にいる彼を見つめる。

照れたように鼻の頭を掻きながらごによごにと言う。

「たまには・・・さ、彼女サービス？」

そこまで言って恥ずかしかったのか、手を引いて椅子に座らせる。向かいに座ってシャンパンを軽快に鳴らして開ける。

「準備してたから遅れたの？」

とぽぽ・・・と二人のグラスにシャンパンを注ぐ。

晃司はグラスを持ち、傾ける。

慌てて恵もグラスを持ち、カチンと鳴らす。

「うーん、まあ・・・そんなところ」

シャンパンに口をつけて視線をそらす。

恵は同じようにシャンパンに口をつけてくすつと笑う。

「ありがとう、晃司」

唸りながらガシガシと頭を掻く。

彼の困ったり、照れた時の癖だ。

「いつも待たせてわりいとか思ってたから。たまには先に動いてたかったっーか……何笑ってんだ？」

くすくす笑う恵に半眼になって赤い顔を向ける。

「ううん、嬉しくて。晃司、大好き！」

恵は素直に気持ちを告げる。

晃司は嬉しそうに笑ってテーブル越しに素早く唇を奪った。

「俺も。喜んでくれたんならよかった。さあ、食おうぜ？」

クリスマスの日、私は幸せな一夜を過ごした。

次に会う時、きっと私の彼は待ち合わせに遅れずに来るだろう。

そして言うんだ、遅いぞって嬉しそうに。

それを楽しみにしながら、私は今待ち合わせの場所に行く。

(後書き)

クリスマス仕様です。季節が変わるとイベント物が書きたくなりま
す・・・(〓〓〓〓〓〓〓〓)そして書いてみました。なんの
捻りも盛り上がりもないですね。ただの自己満足のようです・・・
すいません。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2594b/>

来ない彼と待つ私

2010年10月8日15時15分発行